

キリスト道講演会 (東京第3回)

## 日常生活の中に生きる聖書

2004年10月17日 (東京 法曹会館)

奥田 昌道

キリストは下々の中へ 生きている限り福音のため キリストとの出会い キリストを語る友人がいて 自己中心から神中心へ 天の父はすべてご存じなのだ 父が私の中で業をなさる キリストを求めよ 愛と誠が流れきて 苦悩の中の教会生活 小池辰雄先生の講演「無的実存」を聴く 神さまの世界は根っここの世界 私が十字架で片づけてしまったよ 「主さま！」と言えば、もうキリストに満たされる 私の中に宿りたもうお方 神の霊をいただいている我々 神のみに従え 無条件絶対の十字架の愛 全部引き受けてくださるキリスト 一人ひとりが天下一品 本もの世界に入れ 罪と死の法からの解放 聖霊 助け主、霊なるキリスト 飛び込む先はキリストのふところ 愛に生きた人、心優しい人に神は宿りたもう 豊かで広々とした世界に入れていただく おさなごのように神の国を受けとる

### ●キリストは下々の中へ

皆さま、よくおいでくださいました。この法曹会館は、私にとって非常に関わりの深い所でございます。最高裁判所に勤めましてから3年半、何かと、祝賀会、送別会、そういった催しは、この会場で行われました。その思い出深いこの会場を、このたび講演会のために、快く提供してくださいましたので、私は大変感謝しております。

不思議なものですけれども、いつもこういう会を開きますと、大体、座席がほぼ埋まる。全然、計算していない。予約もとっておりません。それでも、大体うまく埋まって——そのうちに立ち見席ができるかも知れませんが——本当に不思議だなと思う。今日のようないいお天気で、皆さん戸外に出て、ピクニックだとか、マラソンだとか、そういう楽しみもあります。その他、芸術的な楽しみもあります。こういう所に集まってくださる方は本当に奇特な方だと私は思います。

私は日頃から自分の中に根づいてしまったこの聖書、キリストの言葉——いや、キリストという霊的人格です——私の中にキリストが住まっておられますので、その御方のことを話したい。どんなに話しかけても、やはり皆さんは距離をおかれるんですね。

「お前は変わった人間だね。なんでそんなものが必要なの？」

というようなもんです。これは越えがたい溝みぞだと、私はいつも思う。どこに問題があるのかと時々考える。一つは、キリスト教というのはやはりイスラエルで生まれ、ヨーロッパに育ち、そして、ヨーロッパからあるいはアメリカから日本に流れ込んできた。だから、自分たちにとっては非常に異文化である、違和感があるという、それが一つあるのではな



いかと思います。

それともう一つはやはり、キリストが語っておられる言葉——聖書全体と言ってもいいけれども——キリストの言葉に、あるいはキリストの行為に表れていますキリストの世界というものは、あまりこの地上で、つまりこの世で満ち足りた方々、この世で満ち足りる方々には必要がないんですね。ちょうど、「こんにちは」と言つて、押し売りではありませんけれども、玄関口へ商売にみえる方がありますね。

「うちは全部満ち足りておりますから結構です」

と言つて断るわけです。何を持ってこられても、

「満ち足りておりますから」

と言つて断る。それと同じように、このキリストの言葉、聖書の示そうとしているものは、満ち足りている方にとつては、どうも必要性がない。そうすると、誰が必要なのかということになります。

それはいわゆる「山上の垂訓」と言われているところがあります。

「幸いなるかな、心の貧しい者」

あるいは、「霊の貧しい者」と言う。そして、続く言葉は、

「幸いである、悲しんでいる人は」

と。そういう悲しんでいる人、この地上でいろんな苦難を背負っている人、不幸で涙を流した方々、どん底にいる方々に、あのキリストの語りかけというのはしみ込んでいく。私はそう思うんです。ですから、たしかに異文化であるかもしれない。しかしながら、それだけではない。やはり、あまりにもそこで語られている次元というものが天の次元であるから、この地上の次元とは、かなりそこに隔たりがある。それがやはり根本的な原因だろうと思います。

もちろん、異文化という点で、日本にヨーロッパから伝わってきた「キリスト教」でありまして、本当のあの純粋なキリストご自身をもつと私は伝えてほしかつたと思う。ところが、「キリスト教」というひとつの文化、宗教体系というものが日本に入ってきて、その通りでないこと承知しない。私はそんな感じを受けた、宣教師さんからいろいろお話を聞いていて。

日本人は和服が似合う。ヨーロッパの洋食もいけれども、和食が恋しい。そういう多様性というものを、どうも、ヨーロッパだとかアメリカから流れてきた、しかも熱心な教団、教派というものは許さなかつた。そこに日本の家庭の中に入りこめなかつた一つの原因があるのではないかと思う。それから、インテリの中に入りましたけれども、本当に下々しもじもの中に入らない。

ところが、あの鎌倉時代の親鸞だとか、法然だとか、あるいは日蓮だとか、白隠だとか、良寛だとかは、みんな下々の中に入って行った。しかも、その下々というのは、ろくに食



べるものもない。病気がやりますとバタバタと子どもたちが死んでいくという、まことに悲惨な時代に、あの鎌倉仏教の人たちは、民衆の中に入って行ったということに非常に私は感動する。その方々は決してこの世的な幸せを約束しなかった。良寛さんだって、子どもたちと手毬まりをつきながら遊んでますけれども、心の中では泣いているわけです。明日はもう身売りされる、売りとばされる。そういう子どもたちと黙って手毬まりについている。そうなりますと、

「生きよ。この地上の満足というのではなくて、本当の天の世界で、仏さまの、弥陀の本願によって助けられる極楽浄土で、あなた方は本当の幸せに出会うんだから、南無阿弥陀仏を称えるだけでいいんだよ」

と。親鸞だってそうです。それが民衆の中にずーっとしみこんでいく。

私は、キリストの福音というものもやはり、そういう角度であるべきだろうと思う。今まで自分たちが育ってきたヨーロッパというものをかなぐり捨てて、本当に生なまのキリスト、霊なるキリスト、今も生きて働いておられるキリストを、

「わが言ことばは霊いのちなり、生命いのちなり」

という、そういうものを言葉でなくて、自分の生き方そのもので、身からだ体で示す。どこか神棚に飾ってある装飾品ではなくて、本当に「私を見たものはキリストを見たのである」というようなことにならなくては。キリストは、

「私を見た者は父を見たのである」

と仰った。それで「神を冒瀆する」ということで憎まれてしまったわけですけども。

今度は、私たちはキリストをいただいたならば、たとえ不完全であろうと、

「私の中にはキリストが生きています。霊なるキリストが生きて働きたもう。私はくだらない人間であるかもしれないけれども、この土の器の中に働きたもうキリストというお方は凄い。私のことをボロクソに言ってもいいけれども、私の中にいらつしやる輝くキリスト、この方をボロクソに言ったらだめだよ」

と。そういうことではないかと、実は思っている。

### ●生きている限りの福音のため

今日は、「日常生活の中に生きる聖書」という題をつけました。それもそういう気持から題を付けた。私の話は、いわゆる知的な文化的な教養を高める、そういう話ではございません。本当に生命いのちの世界にみなさんと一緒に入りたい。地上にありながら、そこに天国が実現するような、天国を歩いているような、そんな境地になつていただきたいと思う。私も72歳になりました。まあ、あと30年くらいは地上に置いていただきたいと思ってるけれども、それはわかりません。

「もう70を越えたら、生きてるだけで丸儲け」



なんて言うけれども、もう70歳を越えますとやはり、いつ「終りだよ」と言われても、文句は言えない。サッカーでいいますと、「アディショナルタイム」と言うんですか、いつフイナールが来てもよろしいという、そういう心境です。けれどもだからこそ、一日一日を本当に大切にしたいという、一日一日をあだやおろそかにしてはならないという気持ちがあるものすごく強い。

大学では——今は法科大学院ですけども——学生も必死です、こっちも必死です。法科大学院という大変な制度が始まってしまっていて、そのうちどうなるかわかりませんが、れども、そこでも私は全力投球です。教えるだけではなくて、学生たちに、夕方になると、一週間に一回、

「鴨川のほとりを走ろうよ」

と言って、学生たちをランニングの方にも案内しますし。この頃、秋になって夜遅くになりますと、もう暗いですから、京都御苑の御所の建物の回りを——紫宸殿ししいでんという——その建物の回りを、せんだつての木曜日もくよびにちゃんと走ってきました。それで学生たちも非常に満足してくれて、それから金曜日に東京へ参りました。金曜日の晩は、桜田門に集まって皇居の回りを走る会をやりました。24〜25人集まってくれました。それが終わりますと、この法曹会館の小さなお部屋で懇親会をほんの1時間ほどやります。それを月一回やっているわけです。

それで上京しました週は日曜日に、さきほどご紹介にあつた、東京キリスト召団新宿集會でお話をする。これは私の恩師の集まりです。恩師はちょうど8年前にお亡くなりになりました。今年でちょうど生誕百年ということになる。小池辰雄という方です。

その先生の残された蔵書の何千冊かが新潟県の小国町おぐにというところに愛蔵書センターというのができました、武蔵野市に一旦寄贈されたものが、その小国町の愛蔵書センターで所蔵保管されている。そこに9月26日に行つて参つた次第なんです。

私はもうとにかく身体の続くかぎり、地上にあるかぎり働きたい。これはお金の問題じゃない。人間、お金で動いたら絶対だめです。お金ではない。本当にやりたいことを、やるべきことに全力投球していけば、お金はどこかから転がりこんできます。「どこかから」なんて、私はちゃんと大学できちんと給料をいただいています。教科書の印税もときたま入ってきたりもいたしますし。私はこういう福音の奉仕の活動では、

「お金は一切要りません。それを受け入れてくれる所でない、話しません」と言っている。それは主催者は大変なんです、会場を借りたりとか。

### ●キリストとの出会い

私の話は気楽に聞いていただきたい。固く聞くとだめですから。気楽に聞いてもらつたら、2時間でも3時間でもきつと、「ああ、もう時がたった」と、そうなると思う。私は授業し



ましたら、2時間半くらい、へいちゃらで話してしまおう。立っていることは平気なんです。教室で立たされたことはありませんよ、小学校のころから。立たされはしなかったけれども、その報いで、教師になつてからは立ちっぱなしです。2コマでも3コマでもやりますからね。今日、お話ししたいのは、私のまあ言うならば——『余は如何にして基督信徒となりし乎』という内村鑑三の小さな本がありますが——私が若いころからどのようなようにしてキリストに出会ったか、聖書に出会ったか。そして、聖書に出会ってからまたどんなに悩んだか。その悩みの中からどのようなようにして切り抜けてきたか。そんなことを少しお話しして、後半では、日常生活の中に生きる聖書の御言、それを時間のゆるすかぎり皆さんと一緒に味わいたいと、そんなふうみことばに思っております。

さて、私と聖書あるいはキリストとの出会いということになりますと、今から48年前、1956年の7月7日、七夕さんの夜です。大学の研究会の打ち上げのあとで、一人の友と京都大学の構内を歩きながら、その友からイエス・キリストという方の話を聞いた。生まれて初めてまともにキリストという方の話を聞いた。西洋歴史の中では、イエス・キリストのことは歴史の先生が話してくれたけれども、そんなにまじめには聞いていなかった。大学を出まして、自分が研究者の道を歩み始めて2年目です。23歳。私は大学を出ますとすぐに民法の研究助手という身分で大学に残つて、民法学の研究をスタートしたけれども、やがて、人生の問題で悩み始めました。本当に人生の問題で悩みに悩み、生きているのが苦しくて、私の内側は光を求めて闇の中を彷徨さまよつていた。

何のために自分は生きているのか。何のために学問するのか。一体、自分とは何ものなのか。誰も明日の命は保証してくれません。人間の命のたよりなき、はかなき。そして、内側を見れば、やはり罪深いという意識はずつとありました。自分自身の中に光がありません。私を支えてくれるものもありません。しかも、無目的に学問に打ちこむ。

「なに？ 学者になるのに、無目的に学問に？ そんなバカなことがあるか」

と、皆さんは思われるかもしれないけれども、私はそうだったんです。私の学問上の恩師が、「学校へ残つて勉強しないか？」

「はい、わかりました。私は会社でようやくやっていけるような器用な人間ではないので、勉強させてもらいます」

と言つて残つたんです。「何をやるか」と言われても、わからないでしょ。ドイツの本を読みまして、

「どうだ。何か見つかったかね？」

「いえ、見つかりません」

と、そんなことの繰り返しでした。それで何とか1年たったところに、先生から課題をいただいて、それをやり始めた。そんな生活だったものですから。その2年目の夏頃、もう本当に行き詰まつておりました。自分というものに対する、何か言い知れない不安というも



のに苛まこされました。

●キリストを語る友人がいて

と申しますのも、それまでの自分というのは、

「自己責任だ、自分のことは自分で」

と。これは経済的な問題も全部含めまして、自分自身だけを頼りにして生きていく。そういう生き方を、私は当然だと思っておりました。それが辛つらくなってきた。堪えがたい。そんなことで、どうしようもなくなってきたときに、クリスチャンの友人が——それまではあまり親しく話をしたこともなかった友人なんですけれども——研究会の打ちあげの夕食会の席でちよつとキリストの話が出てきたら、彼がまじめになつて答えている。ところが、みんなが嘲あざわるんです。もう、からかわれているんだから、そんなものは蹴飛ばせばいいと思うのに、真剣に答えている姿が実にいじらしいと思えました。それで終わりましたから、

「君、僕は実は悩んでいるんだよ。話を聞いてくれないか」

と。「もう待つていました」という感じだったのかどうか、ずっと京大の構内を散歩しながら、彼はキリストのことを話してくれた。その彼の顔が、星空のもとで天使のごとく輝いていましたよ。私は話の内容がわかったわけではない。それでも、

「キリストに委ゆたねぎつてこんなに安らかに輝いている、こいつをこんなふうになさせているキリストというのはやはり凄いなあ。ひよつとしたら、ここに自分の求めていたものが見つかるかもしれない」

と、そんな思いで、ちよつどそれは土曜日の晩でしたから翌日の日曜日の朝、その友人がやってます小さな集会に行きました。民家を借りて一部屋でやっていました。

もともと、フィンランドからやって来た宣教師の集まりですけれども、宣教師さんは夏休みで本国へ帰っていましたので、彼が代行していました。もう本当に純粹で、キリストの言葉をそのまま語っている。私はそれに大変感動して、それからしばらくそこでお世話になりました。

私は聖書の中に、またキリストという霊的な人格の中に、私の求めている何かが見つかるかもしれないと思いました。かすかな希望の光が私の中に入ってまいりました。でも、それまでそうでない生活をしてきた人間が、そういう教会生活と言いますか、そういう中へ入るといふのは、これまた大変なことですよ。だいいち、「日曜日は必ず来なさいね」と言う。

「日曜日に行かなかつたら罪なんですよか？」

「罪とは言わないけれども、やはり来る方がいいでしょうね」

と言われたら、行かざるを得ない。それまでの日曜日の過ごし方というのは、自分の好きなことをやっていただけですから。「うむ、日曜日に必ず行かなければならないのか。でも、背に腹は変えられない。行こう」ということで行きました。



次は、聖書に書いてあることは、荒唐無稽なことがまず出てきましょ、旧約聖書の始めから。「元始に、神、天地を創造たまえり。」  
という。七日間で天地を造られた。人間は土くれから造られたとか。そして本国から帰ってきた宣教師いわく、

「これは本当です。これをその通り信じなければなりません」

「そんなものは自然科学の方から言ってもおかしいのではないですか？」

「いや、その通り信じなければなりません」

と。困ったなと思いました。もう少し私が利口であれば、いろんなキリスト教の本をかたつぱしから読んで、そして、さまざまな見方があるということを知ったでしょうけれども、その頃の私にはそんな余裕はありませんから、もつぱらそういうふう言葉で説明してくださるものしか近づけなかつたものですから、「ああ、これは窮屈なことだ」と思った。まあ、言うならば、自然科学の世界と信仰の世界というものとぶつかり合いということですよ。

### ●自己中心から、神中心へ

旧約聖書を含めまして、聖書というのは大変なボリュームの本でありますし、わからないことがいっぱい出てきます。それでも、私がおの道に入ろうと決心した以上は、やはり続けて行かなければならないと思えました。それまでの自分というのは、さきほど申しましたように、

「自分が主人でなければならぬ。自分の行く道は自分で定めなければならぬ。」

自分の力で歩む。自分が全責任を負う。誰にも頼らない。自己責任ということ。

自分のものは自分で背負って行くんだ、それしかない」

と思つて歩んできました。ところが、このキリストのお話を聞き、キリストのところへ来ますと、それが大変な間違いだったということを知られました。

「キリストという方が私の主であつて、主人公であつて、私はその僕にすぎない。」

それを自分が自分の主であるというふう思ひ込んで、責任をとらねばならぬと荷物を背負い込んで、そして一人でくたばっている。これは実に心得違いもはなはだしい」

ということがわかつてきた。私はそのお方に自分を託して、そのお方のおぼしめしのままに生きていく。これが人の道だと。主客の転倒です。そのことにまず気づかされて、これは私にとって大きな発見でした。つまり、自己中心から神中心へ、自己責任から神責任へ、とこういうことになるわけです。

### ●天の父はすべてご存じなのだ

その頃に、私の心をとらえた聖書の言葉を三つほどご紹介したい。一つは、さきほど読



んでいたいたあのマタイ伝6章25節からの、

「<sup>25</sup>この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。<sup>26</sup>空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優る者ならずや。<sup>27</sup>汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加え得んや。<sup>28</sup>又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、勞せず、紡がざるなり。<sup>29</sup>然れど我なんじらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。<sup>30</sup>今日ありて明日、炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや。」(マタイ6・25〜30)

と。私は今、文語訳で引用しましたが、時代錯誤だと言われるかもしれないけれども、文語訳の響きがいい。「あなたがたは……なるであろう」という口語訳よりも、神さまに「汝」と言われると、「はっ」と直立不動になりますもの。そして、非常にリズムがある。詩を読んでいるような感じがいたします。やはり、神の言葉、キリストの言葉というものはリズムがあるんだと思う。旧約聖書の預言者の言葉もそうです。イザヤ書などもそうです。非常にリズム感にあふれています。そういうことで、今日はあえて文語訳で印刷していただきました。

ここで今、読みましたことは、結局は、我々の生存の問題、経済の問題、即ち衣食住のことです。そして、人間というのはとかく、この衣食住のための煩いでいっぱいであつて、なかなか心の豊かさとか、内面の世界まで入れきれない。

さきほど、私は、この世のもので満たされているから、こういう会を開いてもなかなか足がそちらへ向かない、話を聞こうという気持ちが起こらないと申しました。満ち足りているからと。一方で、「満ち足りているから」と言いながら、それでは本当に明日のことを思い煩わないで、毎日毎日が平安だという人がどれだけいるか。家族の問題、その他いろんな問題があります。台風が来たり、地震が来たり、何が起こるかわからない。そういうまことに地上の世界というものは不安定きわまりない世界です。

そこにだけ埋没していたら、私は、心配性なのか取りこし苦勞なのか、とてもケセラセラ(なるようになるさ)では生きられなかった。そして、気楽にやっている人がなにか不思議で、うらやましくてならなかった。この御言に出会いますと、「なるほど、そうなんだ」と。

「あなた方は空の鳥よりもほるかに優れた素晴らしい存在ではないか。天の父はあなた方のことを慮、ついでにくださるんだよ」

「<sup>30</sup>今日ありて明日、炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや」

と。自然は美しい。本当に美しい。一木一草、それぞれに生命があります。それ以上に



あなた方のことを天の父はちゃんとご存知でいてくださる。ああ、それを私は知らなかったという、そういう思いでした。

「<sup>31</sup>さらば何を食くらい、何を飲のみみ、何を著きんとて思い煩わづうな。<sup>32</sup>是これみな異邦人の切に求むる所なり。」

ここで「異邦人」と言いますのは、私たちから言いますと、父なる神さまを知らない人のことです。なにもユダヤ教以外の宗教というふうにとる必要はありません。

私はおよそ聖書の言葉を全部、現代風に翻訳いたします。聖書というのはやはり、その時代、その民族、歴史、風土、そういう具体性の中で語られています。それでいながら、その中には非常に普遍的なものがある。我々万人に共通なものがある。みんな同じ人間なんです。みんな魂をもった人間です。しかも、まことに儂はかない生命の中に生きている人間です。そういう人間に語られている言葉には、永遠の真理が含まれている。それを私たちは、その核心をとりだして、それを現代の我々の生活の中に生かす。これが、私がさきほど申しました、

「宗教体系としてのキリスト教をもちこむのではなくて、本当に活けるキリスト、  
霊なる人格キリスト、その方に直接、出会おうよ」

という呼びかけなんです。

### ●父が私の中で業をなせる

話は飛びますけれども、私たちは同じ太陽を全世界の人が見えます。地球は一つ。太陽は一つです。太陽の引力で、地球は自転しながら、その太陽の回りを回っているわけです。そして、日本は、ありがたいことに、春夏秋冬の四季があります。そして、今日のような素晴らしい太陽の光を浴びて、私たちの心は実におだやかになります。太陽の光と熱をあびて生きている。ありがたいことなんです。その太陽は一つの太陽だけれども、万人を照らし、万人の中にしみこみ、そして生かしている。私はドイツでも太陽を見ました。

「ああ、この太陽は日本で見た太陽と同じだなあ」  
と、そういうふうに思いました。これが本当の世界だと思う。そんな「何々教」だとか、「どの宗派がどうだ」とか、そういう小さな区別に、差別に囚われないでください。本ものは本ものの生命の太陽です。それによって我々地球上の万人は生かされている。現代人だけではない。ずっと昔から太陽の恵みで人は生きてきました。

地下資源も全部、太陽の恵みだそうです。そういうもので生かされている。もし、太陽がなかったら、地球はまっ暗、地上はまっ暗です。そして、やがて生命は死滅するはずですよ。その太陽の光で生かされ恩恵を被こうむっているのに、あまり皆さんは太陽にありがたいと仰らないんです。私は不思議でしょうがない。私だったら、太陽の前に「ありがとう」と言う。そうすると、すぐ「偶像崇拜だ」とキリスト教の方は仰る。とんでもない。太陽の恵みな



くして、我々は生きていられるか。「ありがとう」と言うのは当たり前ではないかと。そのように実は、キリストが「父」と呼ばれた神さまは、姿は見えませんが、姿は見えないけれども、キリストはその方を「父よ」と親しく呼んでおられた。

「父よ、<sup>みこころ</sup>汝の御意をなさせたまえ。私が語っている言葉は私の言葉ではない。父が私の中でお語りになつていて、私のしているいろいろなわざは癒<sup>いや</sup>しの業<sup>わざ</sup>とか、本当にいろいろな御業<sup>みわざ</sup>が聖書に出てきますね。」

あれは全部、私の業ではない。父が私の中で業をなさっているのである」

と。キリスト自身は「何もない」と仰っている。本当にそういうお方です。「何もない」というお方の中に、我々がつかみどころのない、父なる神さまが全的に100%に宿っている。だから、

「私を見た者は父を見た」

と言われた。そういうキリストに我々は直結したい。太陽に直結するように我々はそういう霊なるキリストに直結する。キリストは死んでおられません。生きておられますよ、キリストは見えない姿で。死ぬはずがない、あのお方は。我々は死にます。だから、キリストは我々に、

「死なない生命をあげよう。それをただでやろう」

と言つてくださったわけです。ご自分はその十字架という、どうしようもないマイナスを背負いこまれた。

### ●キリストを求めよ

キリストがこの言葉を語つてくださっている。「異邦人」というのは、そういう本当の神さまの世界を、霊なる太陽の世界を知らないで、自己中心というか自己責任で、自分で自分の道をきりひらこうとする。「自分、自分、自分」と言つて。しかも、

「これは立派な道だ。男はこうあるべきだよ——いや、今は女性もそうかも知らないけれど——男子たるものに頼るか」

とやっている。いや、私は学生からも笑われたですよ。

「私はキリストを信じている」

と言つと、ザワザワザワザワとして、いかにも

「かわいそうな先生だ」

というような顔で私を見るんですよ。

「そうか、そんなに私は可哀相か。君らはそんなに幸せか」

と言つて——「今にみる」なんて言いませんけれども——まあ、そういうもんです。だから、私は、そういう意味で、この「異邦人」であつたわけです。

「<sup>32</sup>是<sup>これ</sup>みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡<sup>すべて</sup>てこれらの物の汝ら

に必要なるを知り給うなり。<sup>33</sup>まず神の国と神の義とを求めよ。

この「神の国」というのは、今ふうに言う、「キリスト」のことです。キリストの世界、キリストご自身、それを求めなさいと。つまり、キリストを求めていけば、

然らば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。」

必要なものは全て添えて与えられる。今までは、

「まず身の回りを整えて、まず豊かになって、それから神さまに向かおう」と。うそですよ。マルクスの方々は、

「まず、豊かにならないとだめだ」

と言う。豊かになったら、

「神さまなんか要らない」

と言って蹴飛ばしますから。貧乏なときは、

「まず、衣食住がなければ。そんな神さまなんて言っちゃって、何もくれないじゃないか」

と。結局は、神さまは要らないという世界なんです。

私は、さつき申しましたように、自己責任で自分で自分の必要を満たさなければならぬと思つて、あくせくして、とうとう自分自身が内的に死んでしまつていた。そこで、この御言葉にふれると、実は本当に自分の見当違いのこゝとをやつていたということに目覚めた。私は目覚めたらあととは速いんですよ。もうこれだと決まつたらまつしぐらですから。大体、そういう非常に単純な人間ですので、これだと思つたら、もうそこへ行きます。

ですから、それ以降は一切、経済問題は私はもう心配しなくなりました。研究室へ、生命保険の勧誘にこられた。私は初期の頃ですから、非常に単純ですよ。

「私は保険はかけません。私を慮おもんばかつてくれる神様がいらつしやるのに、生命保険をかけるということは神を信じないことだから。私はそれは神様を裏切ることになる」

と言いましたら、諦あきらめて帰りました。僕はあとになって、気の毒なことをしたと、今は思つてます(笑)。やはり、しかるべきことは、家族のためにもいろいろやつた方がいいけれども、私はその頃は、本当に純粹でしたから。今だつて純粹ですけれども、もう少し幅ができました。でも、その頃はもう本当に一直線だから。そのくらいに私はひたむきに、その御言葉に自分を投げかけて行つた。

これも私は失うものがなかったからできた。あの時にキリストに出会つてなかったら、もう首を吊つていたかもしれないし、精神的に変になつたかもしれない。そういつたどん底から、光が射し込んできたときに、そこへすうつと入つて行けたのだと思います。



## ●愛と誠が流れきて

それからもう一つは、マタイ伝11章28節から。

「<sup>28</sup>凡て勞する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません。<sup>29</sup>我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負いて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。<sup>30</sup>わが軛は易く、わが荷は軽ければなり。」

これは慰め深い言葉でした、今もそうです。へトへトになっている人間に対して、

「凡て勞する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負いて我に學べ、

「軛」というのは、牛の首のところに棒をかけられて歩いていて、それだと思えますけれども、我が軛を負いて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は軽ければなり。」

と。キリストが、

「一緒に背負ってあげよう」

と言つてくださる。ありがたいことだと思いました。

それから、三つ目の御言葉は、これは旧約聖書のソロモンの「箴言」というところです。箴言3章3節から。この頃は私は口語の聖書を使っていたので、それをお読みしたいと思います。

「<sup>3</sup>いつくしみと、まことを捨ててはならない、それをあなたの首に結び、心の碑にしるせ。<sup>4</sup>そうすれば、あなたは神と人との前に恵みと、誉とを得る。」

この「いつくしみと、まこと」と言うと、愛と誠です。

「いつくしみとまことを捨ててはならない」

という。有る人はそれを捨ててはならない。自分の中になければ、ただけなないとしようがない。あとになってわかりましたけれども、こういった「いつくしみと、まこと」「愛と誠」は、キリストに出会って、キリストに抱かれて、キリストから湧き出てきて自分の中に流れてきて、初めてこれを言える言葉です。その頃はやはり、いい言葉だなあと思いました。「神の前に恵みを、人の前に誉れを」と、こういうことになるでしょうか。

<sup>5</sup>心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。<sup>6</sup>すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。<sup>7</sup>自分を見て賢いと思つてはならない、主を恐れて、悪を離れよ。<sup>8</sup>そうすれば、あなたの身を健やかにし、あなたの骨に元氣を与える。」

その頃は、私は肉体的にもかなりまいっていた。大学内の診療所へ何度も通っていて、カルテはもうぶ厚くなっていた。そういう状態であったので、この御言葉にぶつかりましたときに、

「そうすれば、あなたの身を健やかにし、あなたの骨に元氣を与える」



とあります。だから、信仰という、キリストに出会うということは、単に心の内的な平安とか満足だけではなくて、心身全身が健やかにされるんだということがわかりました。よく、「病は氣から」と言いますが、本当に何かそういうふうな思い込みが私にはありました。私には思い込みだらけの直線ですから、それからもうヒタツと医者の方へ行かなくなりました。

「あなたの財産と、すべての産物の初なりをもって主をあがめよ。10 そうすれば、あなたの倉は満ちて余り、あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる。」

よく、キリスト教の方では、献金ということを行います。旧約以来、「十分の一献金」とか。私はちよつと「十分の一」は多すぎると思つていられるんですけども(笑)。ま、量にこだわることはないですよ。ところが、キリスト教のいろんな入門書とか、「キリスト信徒としての信仰の進歩のために」というようなことを書かれた本を読むと、必ず「十分の一献金」が出てきて、「これはちよつと？」という気持ちになりました。夏にいろんな所から同門の宣教師に導かれている、あちらこちらの分会から一緒に集まる聖会というのがある。そういう研修会があつたときに、私は手をあげて質問した。

「十分の一献金というのは、税込みですか、それとも手取りで計算するんですか？」

と、本気で恥を忍んで。私はそのくらい真面目だった。同じ「十分の一」だつて、税込みと税引きでだいぶ違いますもの。今なんか、私は三分の一は持つていかれていきますからね、高給取りで(笑)。だから、税込みで計算したら、もう無くなつてしまいますよね。ところが、三浦綾子さんという方は凄いですね。あの方のお話を読んだときに、「十分の一を献げなさい」と言われたら、

「はあ、たつた十分の一でいいんですか。九割も自分のものになるんですか」

と言われたという。やはり人間の器がちがうと思つた。ああいう数値で言われるとまた、こだわるではないですか。もうそれ以来、私はこだわっていませんけれども。

とにかく、自分の初穂を感謝をもって献げるといふことはいいことです。孝行息子は初月給をお父さんやお母さんに捧げます、全額かどうかは知りませんが、お母さんだけでも。

「初月給で買いました。お父さんどうぞ。お母さんどうぞ」

とか。ましてや、我々はそういう初成りの産物、一番いい初穂、それを神さまに献げるといふのはごく自然なことなんでしょう。イスラエルでは、それは「十分の一」というような形で、レビ族という神の部族を支えないといけません。十二部族のうち一つの部族はそればかりに専念してますから、それを他の部族が支える。そのためにはやはり「十分の一」は必要だ、ということだつたんだろうと思います。それは別に、

「あなたの財産と、すべての産物の初なりをもって神をあがめよ。そうすれば、あなたの倉は満ちて余り、あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる。」

とありますので、皆さん、これは本当に一遍自分で実験してやつてみてください。ケチケチやつたらだめですよ。喜んでしないとね、そういうことはすべて。



## ●苦悩の中の教会生活

こういう言葉が、本当に私のひとつの導きの星になりました。こうして、私は教会生活を始めたけれども、さあ、それからあとは幸せいっぱいかというところ、そうではない。新たな苦悩が始まりました。本当にこれは辛かったですね。宣教師さんは、

「あれをしなさい。これをしなさい。全部、その通りしなさい」

と仰るでしょ。その他いろいろ、キリストの言葉があります。できっこないんですよ。

「汝の敵を愛せよ」

と言う。敵は、一発殴られたら二発殴り返してしまうのが人間性なんです。

「左の頬を殴られたら、右の頬を出しなさい」

と。それをその通りしなさいと言う。すべてそうでしょ。それから、

「心の中で人を憎むものは殺人に等しい」

と書いてある。すべてその他もろもろを人間の自力じりきで実行しようと思ったら、これはもう、また私は行き詰まって倒れてしまうだろう。できたような顔をしているのは、私は嫌なんです。

「できてなかったら、日々悔い改めなさい」

と言われるわけです。悔い改めて、また明るる日、本当に出直して立派になれるなら、それは悔い改めもしますよ。けれども、悔い改めたって、明日も次の日も同じなんです。それを毎晩毎晩、「今日一日の罪をお赦してください」なんてね、そんなの私はごめんだと思つた。すると、

「あなたの信仰が足りないからです」

と、こう言われるでしょ。まあ、そういうことで、また私の悩みが増えました。

それがある程度、要約しますと。一つは、さつき申しました、聖書の受けとり方です。

「文字通りその通り受けとらなければならない」

という。それから二番目には、

「日本の文化や宗教とか、伝統というものに対する全くネガティブ(否定的)な態度」

です。これは私の出会った北欧から来た宣教師団というものが特殊だったのかも知れませんが。また、ひょんなことでそういうところへ私が導かれてしまったというのも、何かの神さまの思おぼし召しなのかも知れない。そこもいい加減な集まりなら、私は悩まなかったけれども、熱心なんです。非常に情熱的なんです。「聖霊のバプテスマ」と言って、聖霊を受けるとか、そういうことも非常に熱心な方々です。日本の仏教とか、日本の文化的な伝統、そういうものに対してまったくネガティブなんです。今から思いますと、結局文化摩擦です。異文化に対する排他的な態度。これはだめだと私はそのとき感じました。

それから三つ目は、「キリスト信仰というものと現実生活との関係」です。これは何かと言いますと、宣教師さんたちは、



「本当にあなたが救われたのなら、神に身を献げなさい」

と言われる。献身です。身を献げる。もちろん、私は自分の人生を神に献げたいと思った。「具体的には、献身とは何ですか?」と聞くと、

「職業を捨てて、伝道者になりなさい。神学校へ行きなさい。それができないということはまだ自分を惜しんでいる。棄てきれないからです」

と言う。これは辛かったですね。

みんながみんな、キリスト信者が全部、伝道者になったら、この世の職業はどうなるんだろうか。くずばかりの集まりになるにちがいないなんて——失礼です、「くず」なんて言いました——しかし、本当に靈に燃えている者が全部引っこ抜かれて、そういう伝道者になれと言われたら、これはやはり本当にそうなのかなと、ひとつの葛藤かっとうがありました。

「私は自分のうちなる声が、本当にそうだという確信がわくまでは、そう簡単に聞き従うわけにはまいりません」

と、その時は心の中で抵抗しました。まあ、あの方々は強要なさいませんから、「まだですか、まだですか」と聞く。「はい、まだです」と。そういうことでした。でも、私にとっては辛かったですよ。つまり、「献げきつていない」と、こう言われるからね。

それから四つ目は、

「あなたはクリスチャンになりました。日本の国はクリスチャンでない者がたくさんいます。あなたの生活を見て、人々がキリスト信者というのはこういうものだと思う。あなたは神の栄光を現す器なんですから、あなたが変なことをしたら、神の名がすたれるんです」

と。まるで代表選手です。「イチロー」(鈴木一郎、プロ野球選手)以上に悩みます。毎日毎日がヒットを打ってないといかん生活ですから。例えば言い争いをしますね。あとになると、

「あつ、言い争いをしたら、これは神の栄光を汚している」

と、思うわけですよ。もう、ものが言えなくなりまして。

「みんなが私を見ている」

と、こう思います。だからもう、閉じこもるのが一番です。引きこもり症候群です。そういう気持ちになりました。ですから、せつかく、キリストによって喜びの世界に入れられたのに、そういうふうには、何だか自分というものが罪を犯し続けているのではないかという、またそういう新たな悩みにとりつかれて、そして落ち込んで行つた。

### ●小池辰雄先生の講演「無的実存」を聴く

そういうときに実は、さきほど申しましたように、小池辰雄という先生との出会いがありました。3年後です。私が1956年にキリストに導かれて、そしてちょうど3年ほどたった、1959年の11月8日、9日でした。京都大学でドイツ文学会の学会が開かれまして、



その時に小池辰雄という先生が来られた。その方は東京大学教養学部のドイツ語ドイツ文学の先生でした。私は京都大学の法学部の助教授という身分でした。ある方が、

「奥田さん、小池辰雄という非常に素晴らしい方がいるから、紹介してあげる」

と言って、間をとりもつてくれて、初めてその先生にお会いした。特に11月9日、月曜日でしたけれども、その夕方、京都大学の付属施設で講演会を主催いたしました——私が「京都大学エマオ聖書研究会」という、そういう研究会の下働きをしております——講演をしていただいた。私は司会者の役を務めました。その時に私は本当に感動いたしました。まことに閉ざされた、狭く苦しい、そういうキリスト教という中に自分を入れなければならぬ。しかし、入りきれないともがいているとき、その先生に出会って、

「ああ、ここには自由な風が入っている。本当に自由な風がある。そして、生命に溢れている。これだ」

と思った。その先生は仰つたですよ、

「よく、世上、『キリスト教に入ると、キリストを信ずると、視野が狭くなる。一つのことしか見ない。視野が狭くなる』と言われるけれども、それは正反対だ。

本当にキリストに出会って、キリストにとつ捕まったら、広くなる。なぜかと言うと、そこで自分というものが消し去られるからだ。その自分というのは自我だ」

と仰つた。つまり、その「己おのれが、己おのれが」と言つて、さっきの「キリストに従う」というのも己の力で従う。その前は己の力で自分の人生を歩むけれども、今度は、神に従うのは己の力で、己おのが信仰ですし、すべて「己」というのがやはり生き残っているわけです。そして、

「己が立派になつて、神さまに『ああ、よくやった』と言われる。それが模範的な信者だ」

というふうに教えられているでしょ。それで行き詰まった。それがその先生はそうじゃない。その時の講演の題名は「無的実存」といいます。そういうタイトルの講演だった。一体これは何だろうか、私は思いました。ところが、その方が仰るのは、まず、

「キリスト・イエスという方自身が本当に無者だ。しかし、無者の無というのは虚無ではない。ニヒリズムではない。己が無い。自我を完全に否定している方だ」

と。「キリストは神の子」と言つても、やはり人間としてお生まれになったから、絶えず戦いがあるんです、きつと。けれども、キリストは神さまの前には己を完全に否定して、

「父よ、汝の御名みなが崇めあがられますように。汝の御意みこころが私を通して成りますように。私をあなたに献げます」

と仰つた。本当にキリストは献げることができた方です。私はできないけれども、さつき言っているように。キリストは神さまの前に空からっぽなんです。キリストは空っぽだから、その中に神さまという天国が充滿した。

「恵福さいわいなるかな、心の貧しき者」



という。あの「心」というのは「霊」という字だそうです。「霊の貧しい」ということは自分を何者ともしないこと。人間は、自分は何者か、サムシングでありたい。「あいつよりも俺の方がこういう点で優すぐれている」と。何か自分の優れているところを見て、自分がサムシングになりたい。そして、そうでない人よりも優越的な地位に立ちたい。これが人間の欲求なんです。自己アピールですよ。何でもアピールしないといけない。

ところが、キリストは神さまの前に完全に自分を否定している。徹底的な自己否定です。それを先生は「実存的否定」と仰った。つまり、「実存的」ということは、意志的ということでしょうね。自然にナチュラルではなくて、自分の意志で自分を否定している。

「キリストは神さまの前に空っぽになっっている。そこに天国、神さまという天国が充滿した。だから、『汝ら、悔改めよ。神の国は近づきたり』と仰った。『恵福さいわいなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり』というのにはキリストの自己告白

「白だ」

と仰る。キリストは、自分が神さまの前に空っぽになっってみたら、神さまという天国が充滿した。「だから、これをあなた方に上げよう」と仰った。

「悔改め」というのは、方向転換なんです。「反対方向に向いているものを神の方に向かわせる」ということ。そういう自己告白という。あの「山上の垂訓」のところで、そんなことを言った人はないでしょ。「何で心の貧しい人が幸いなんだろう。さもしい根性の人間が幸いだとは何だ？」という程度なんです。でも、あの「貧しい心、霊」というのは、「神の前に空からっぽだ」ということ。ルターもそう言っているそうです、

「乞食の如く霊が貧しい姿、それを指している」

と。そうすると、神さまという天国が充滿した。ですから、そこで、

「空っぽなキリストは実は無限の霊である。無というのはゼロ。これは即、無限の

霊だ」

と、こういう話をされた。しかも、「無」という字の成り立ちをこのとき解きあかされた。漢和辞典で調べたら、「無」という字は、

「天蓋てんがいの下に甘にじゅう、甘の林」

ということが、無という字の生い立ちなんだそうです。大空の下に二十、二十の四十の林と、いうのは無数の木があること。ですから、無は、ナツシングのように見えているけれども、それは数えきれないほどたくさんある。そこがニヒリズムの「虚無」と全然違うところです。本当に空っぽに徹したら、そこに充滿するものがある。これがキリスト教的に言って、神の霊が充滿することです。自分が本当に否定されていますから、本当に神の霊に満たされる。キリストは自分を否定していましたから、神の霊に満たされた。

ところがその次の問題として、人間は同じことができるか。人間は本来、完全に自己否定ができるか。さつき私がそうだったと申し上げたようにできない。それで恩師の小池辰



雄先生はそのことで悩んだ。その時にこの「十字架」というものが見えてきたと言う。

### ● 神さまの世界は根つこの世界

先生は次のような告白をされた。それは本当に先生がそれを体験された。自分が無にならない、空っぽになれない。神さまのそういう充滿というものを味わえない。そのときに、

「恵福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

という言葉が次のように響いてきた。

「恵福だよ、お前は。私の十字架でお前はもう片付けられている。あの十字架で、お前の自我というもの、お前の全存在を私は背負いきった。お前はそこで空っぽだ。生まのお前はガラクタカかもしれないけれども、私がお前を背負いきった。そこで神さまの前には、お前は完全に空っぽにされている。無者にされている。『恵福なるかな、汝、わが十字架によって、霊貧しくされた者よ。復活の我、聖霊の我、汝のうちにある』と、こう響いてきた」

と仰った。それが小池先生のアルファ(始)でありオメガ(終)である。それから生涯、死に至るまでそれを告白し続けられた。

「無即無限無量」

と言う。それで、キリスト教の先生方からぼろくそに批判された。「無なんて何だ。禅宗と混同しているのか」とか。そういうことで非常に非難を受けられたけれども。本当のことは本当だと。そういう話をされた。

だから、私は、「ああ凄い、こんなことは聞いたことがない」と思った。

それからもうひとつは、私は、さきほどの「身を献げる、神に従うとはどういうことか」と悩んでいたと申しあげたでしょ。小池先生は大学の先生をなさっているし、ドイツ文学でゲーテの『ファウスト』なんか打ち込んでおられた。それも、「聖書の光からみたゲーテの『ファウスト』」という論文なんです。うらやましいなあ、「聖書の光からみた法学」なんて、そんなことはできないよと。聖書の光からみた民法学なんて、そんなことは私にはできっこないなと思いつながら、先生に相談した。

「私はどうすればいいでしょうか。教師をやめて、伝道者になるべきでしょうか」  
それとも、学問の道をやっていいんでしょうか」

と。キリスト教と学問、聖書学とか、せいぜい、哲学とか、そういうのだったらまだ両立するかも知れないけれども、法学というのはこの世の娑婆しゃばのことをやっている学問です。そんなことをやりながら、キリスト教と両立するのでしょうかと、私は打ち明けた。そして、その講演の中でも仰っていますが、

「樹木を見てごらん。人はみな地面の上に茂っている樹木を見ている。しかし、その樹木には必ず根っこがある。根っこは見えないだろ。上に伸びている長さだけ、

きつと根っこは下に伸びているはずだ。葉が横に広がっているその分だけ、根は横にも張っているはずだ。根が深くそして広くしっかりと支えているから樹木は生命があるんだ。根っこから養分を吸い上げて、そして、立派な幹、枝、葉があり、花が咲き、実が稔る。我々は見える世界を見ている。これが人間の文化の世界だ。政治も経済もその他のいろんな学問、芸術、そういった人間の文化的営みはこの見える世界だ。

ところが、宗教の世界は、神さまの世界は、根っここの世界だ。方向はたしかに違う。地の中に深く入っていく方向と、天高く伸びていく方向はまるつきり違う。これを一緒にするわけにはいかない。けれども、一本につながっている。だから、本当の学問、本当の芸術、人間のあらゆる営みが本ものであるためには、根の世界をもたないといけない。

だから、君は今は学問とそういうキリスト教の信仰が、二足の草鞋わらじということで悩んでいるかも知れないけれども、一本であるということに気がつくときがきつとくるから、気長にやりなさい。そんな、せつかちに答を求めないで、長くやり続けられれば、きつと見えてくるよ」

と言われた。これは私にとつては本当にありがたかったですね。まだ、助教授で、かけだしの身分で、これからいろんなことをやらなければならぬ。直接、そんなキリスト教だとか神さまの言ことばを学問に持ち込むのではなくて、学問の世界は別の方向に伸びていく。キリストの方は下に伸びていく。しかし、一本につながっている。

ということは結局、私という人間自身ですね。私が本当に曇りなき目でものごとを見る。自分の欲や得で学問しているのではない。本ものを知りたい、本ものを極めたいという。自然科学とはちがいますけれども、やはり、そこに何か法則的なものがあるのでしょうか。何か理ことわりというものがあるんだろうと。理なき学問というのはおかしい。私は器用なことはできないけれども、そういう学問の中に、法学の中の理の世界を求め続けたい。非常に基礎的な研究になりますけれども、そんなことに安んじて取り組むことができたのは、そういう小池辰雄という方のそういった導きがあったからだと言ったことができます。

そして、曇りなき目でものが見えて初めて、学問はできる。目が曇っていれば、曇りが歪ゆがんで見えます。だから、キリストに出会うということは、キリストを受けるといふことは、曇りなき目をいただくということだ。偏見がなくなる。あらゆるものを正しく受けとることができる。しかも、それによって支配されない。これが本当の自由なんでしょうね。

警戒するあまり、受けつけないというのも困ります。いろんなものをやりすぎて、自分が、まんなかがなくなるのも困ります。だから、非常に広やかで、賑にぎやかで、自由でありながら、何かそこに一本芯が通っている。それも別に自覚するわけではないけれども、本当に一本通っている。そういうことで、日々の自分の職業を、それが教えることであろうと、学問



することであろうと、その他何であろうと、そういう生き方で貫けたらいいなあと思って、それで私は今日までやってこることができました。

●私が十字架で片づけてしまったよ

小池先生というのは実に自由自在な方でした。どんなことをやっているのか、どうしてあんなに自由なんだろうかと、一方では思いながら、自分はどうしたら、そういうふうな自由な境地に入れるんだろうか。これが私の次の課題でした。

私は、自分で言うのもおかしいけれども、非常にバカ正直で、ある意味では気が小さい人間で、良心的といえば良心的なんでしょうね、ごまかすのができなくて。だから、ことごとくに自分の日常生活のさまざまなのが気になる。

「こんなことで良かったんだろうか。あんなことで良かったんだろうか」

とか、そうやって自分をまた見だすと、本当のものが霞かすんで見えなくなってくる。いつしか、自分にまた向かってしまう。「自分が、自分が」というところに迷いこんでいた。そういう時に――そうですね、いつからかということと言えないと思います。今から10年前なのか、20年前なのか、よくわかりません――けれども、あるときからだんだんと、何かそういう自由な世界というものが私の中に根づきだしたと、言うことができます。それはやはり、先程のキリストの十字架なんです。

「十字架がお前を全部、背負いきっているから」

と。キリストの十字架は、過去に一度あそこに立てられた、そんなものではない。今も立っている。今、私にとつて光輝いて立っています。その光輝く十字架が私のことを全部引き受けてくださっている。それも、過去の自分だけではない。現在も未来も、私の全存在を引き受けてくださっている。あるいは、生まれてから気づかない時も、背負っていただいていたのかも知れない。あるとき、そうやって見えたわけです。だから、ご先祖も、旧約の人たちも全部、あのキリストの十字架で背負われている。過去の人類も、これからの人類も、全部あの十字架で背負われている。そのくらい十字架というのは凄いとということですね。

この世の学問的に証明できるものではありません。でも、本当にあの十字架がそれほど凄いものだということに、気づけば気づくほど、その人は本ものの世界に入っている。そういう気がいたします。だけど、なかなか人間はそれがそこまで徹底できないんですね。中途半端で終る。けれども、本当にそこに徹したい。これは凄いです。なにしろ、自分というものがそこで消えてしまうんだから。

「お前は問題じゃない。そんな生身なまみのお前なんか問題にしてない。十字架できれいに片づいているお前だけを見ているんだから。出来損ないのお前なんか見てない。それは仮象にすぎない。本もののお前は輝いている。私が十字架で片づけたんだ



から。片づけただけではない。そこに聖霊という神の霊、復活のキリストの霊を  
与えるんだ」

と。別な言葉で言うと、キリストが聖霊という姿で、つまりキリストの分身です。霊なる  
キリストは天界にいらっしやる。その方の分身である霊なるキリストが私の中に突入して  
くださる。

「十字架でお前を完全に贖った」

という言葉と密着して、

「私はお前の中に生きていますぞ」

ということですよ。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。御霊のキリ  
ストがわがうちにありて生きたもうなり」

という、パウロのガラテヤ書2章20節がその告白なんです。今までは、「十字架は十字架。  
聖霊は聖霊」と別々に離して考えていた。聖霊は、一生懸命に祈っていたらウワツとや  
つてきて、何か全身がしびれて異言がとびだしてと、そういう現象的なものが聖霊だとい  
うふうに、教えられていた。けれども、そうじゃない。そんな現象ではない。

「本当に十字架が私の中に立ったならば、その時、聖霊は一如となって、十字架と  
聖霊は一つとなって、わがうちに宿りたもう。これが無条件絶対の恵みだ」

という、そのことに気がついたんです。無条件絶対です。条件付けない。この無条件絶対  
ということがいかに大事かということですよ。

●「主さまー！」といえば、もうキリストに満たされる

大和民族にとつては、親鸞上人というのは素晴らしい方です。その親鸞の先生だった法然。  
法然、親鸞というのは無条件絶対の世界を体得した方ですよ。

「老小男女を問うところはな。人の善悪は問題じゃない。弥陀の本願というもの  
があらゆる衆生しゅじょうを救い上げる、その本願をお持ちだ。我々の側でできることは、  
南無阿弥陀仏と称えるだけだ。それしかない」

と。「南無」というのは「祈り入る」ということだそうで、「阿弥陀」というのはあちらの方  
の言葉で「アミッターヤー、アミッターバー」という「無量寿、無量光」ということだそ  
うです。「無量寿、無量光」の「仏」というのは目覚めた人、覚者、悟りをひらいた人。き  
つとお釈迦さんのことなのでしょう。無量寿無量光(阿弥陀)である覚者(仏)に「南無」と  
祈り入って帰依きえしていく。これが「南無阿弥陀仏」です。それを称えるだけだと。小池先  
生は、

「南無キリスト」

と仰った。「南無キリスト！」と言って祈る。



「祈りというのは、そんな長々と祈らなくてもいい。『主さま!』と一言、本気で『主さま!』という声とともに自分を全部、キリストの中にあずけ入れてしまう。投げ入れてしまう。そしてキリストと本当に一つになる。こんな簡単なことはない。何で皆さんは簡単になれないんですか」

と言って、見回すんですね。

「電車の中で釣り革につかまりながら目をつぶって、心の中で『主さま!』と言えば、もうキリストに満たされる。そういう本当に自由自在な世界なんだよ」

ということをお池恩師に教えていただいたわけです。そして、本当に私の全存在がそこで担われる。片付けられた。そのことがわかりましたら、本当に私は自由というものをいただきました。それからもうあとは何の不安もなくなりました。死ぬことだとか、何だとか。それこそ、さっきのマタイ伝の一つ一つの言葉、「思いわずらうな」とか、あれが私の中に受肉したというか、かたい化体したというか、そう思われてきた。

### ●私の中に宿りたもうお方

私が「日常生活に生きる聖書」と言うのは正にそれなんです。飾っておくのではない。私の日々の営み、ランニングするときも、野球するときもそうですよ。何をしているときも、「わがうちにキリストが霊となつて生きています」

ということ。全部、二人三脚をやっているんですから、人に負けっこないわけです。一人でやっている人よりも、二人でやっている方が強いわけですよ。しかも、私の中に宿っている方はもの凄い方ですから。でも、奇蹟を頼んではいけない。自分のできないことをあまり望んではいけません。私に「百メートルを十秒で走れ」なんて、そんなことはできっこありません。そんなことを言っているのではない。

今、「奇蹟」ということを申しましたけれども、私が思う奇蹟というのは、そういう本当に霊なるキリストがこんな人間のガラクタの中に無条件でお宿りくださる。これが奇蹟でなくて何でしょうか。しかも、万人の中に無条件に宿る。

お釈迦さんの世界もそうですよ。

「衆生がことごとく本当に仏になりきるまでは、自分は救われたくない」という願をたてられたというんです。ですから、本当に凄いことですね、向こうの世界もお坊さんたちはやはりそういうものの中に生きていた方だから、あれだけの影響力があったんだと思います。

今度は、こちらは遅まきながら、キリストという方はそれくらい凄いよと。自分たちの先祖たちはそうやって鎌倉仏教で道を開いた。それと同質、あるいはそれ以上の世界を我々にくださっている。しかも、決して排他的ではない。決して排他的ではありません。もう自分がないから、自己主張をしないんですから、排他的になりようがない。キリスト自身が、



「私は空っぽだよ」と仰っているんですもの。ヨハネ伝の言葉なんかをあとでご覧になってください。

「私は自分から何も言えない。私は自分で何も語ることはない。全部、神さまが私の中で、『話せ、語れ、為せ』と仰ることをやっているだけだ」

と。ロボットかという、決してそうではない。人格的な結合です。ロボットは人格関係があるのかどうかは知りませんよ。けれども、「神の僕」というのは人格ですから、人格は決して否定されない。本当の人間として生かされている。本当の人間として生かされながら、自己主張をしない。自我を立てない。そこが違うんです。そして、

「あなたの御意を成してください」

と言って、献げきつっているわけです。それがあるときは殉教の死ということになったり、いろいろなことがあるでしょう。それはやはり、地上というものが最後だと思っていないからなんです。地上百年というのは本当の天上で生きる永遠の世界の序曲なんです。ここでさぼっていたら、あまり向こうでいい生活ができないそうですよ(笑)。ここでいろんな苦難を背負っている方、身体のご不自由な方はいろいろと、神のおぼしめしでそういった運命を担わされていらっしやるんだと思う。

私の孫もそうなんです。二人の男子の孫が生まれながらに筋ジストロフィーということ、非常にそういう荷を背負っていますけれども、天真爛漫で輝いています。そういうふう、人それぞれいろんな重荷を負わされている。しかし、それは地上だけだったら、あまりにもかわいそうというか、不公平というか、残酷というか——もし、地上だけだったらですよ——けれども、本当に天上で輝くんですよ。

### ●神の霊をいただいている我々

イザヤ書にも、足の不自由な方が鹿のごとく跳び走るとか、口のきけない方が神を讃えるとか、耳の聞こえない方は耳が開かれるとか、そういうことがイザヤ書35章に預言されています。それを実は、キリストは全部地上でなさった。民衆たちはご利益的にそれをとらえようとして、キリストと相入れなかった。キリストはご利益でなさらなかった。

「神の国というのはこんなに凄い。本当にやがて成就する神の国ではこんな素晴らしいことが自然なんだ。今はゆがんでいるかもしれないけれども、向こうの世界では凄い光輝ける世界だ。生命の自由に溢れている世界だよ」

と。それを示すためにキリストはいろんな御業をなさった。死人を甦らされた。ハンセン病の人を潔められた。

「貧しい者は福音を聞かせられている。およそ私に躓かない人はさいわいだ」

と。バプテスマのヨハネがヘロデに捕らえられて、牢獄につながれているとき、キリストのうわさを聞いて、獄中から弟子を遣わして、



「あなたが本当のきたるべき方なんですか」

と尋ねさせた。「あなたはもつと政治的な意味で、メシヤ王国を建ててくれると期待していたのに、あなたのなさっていることは何ですか。下々の所へばかり行って、そういう所になさっている。もつと勇ましいことをなさらないですか」という気持ちかも知れません。あの頃の民衆はみなローマの支配から脱却して、あのダビデ王国をもう一度うち建てる。そのためのイエスだと思っていた。だから、「ダビデの子よ、ダビデの子よ」と言うわけです。ところが、キリストは、

「私がやっていることは、そういう貧しい人たちの所へ、病める人たちの所へ行つて手をおく、身体の不自由な人たちを健やかにする、死人も甦らされる。

そういうものが私の福音だ。およそ私に躓かない者はさいわいだ」

と言われました。だから、そういうこの現世を突き抜けたところに本ものがある。

「その現世を突き抜けた本もの世界を今ここで私は現しているから、私のやつていることはみんなシンボル、徴だ」

と。だから、「徴」というのは、それを通して本体なるものを見るという、そこなんです。徴そのものを追いかけたらご利益になる。新興宗教になってしまう。そうではなくて、この徴を通して徴の奥にある本ものを霊の目でしっかり見る。それを見て歩いていく。それがやがて成就する。パウロのあのローマ書の中で、

「目に見える望みは望みにあらず。あの天地創造以来、万物は呻いている。被造物も本当にこの縄目から解かれて神の子の自由に入る、そういう境地を求めて実は呻いている」

と。パウロはそういう自然界の呻きを聞いている。

「神の霊をいただいている我々も実は、この身体が贖われて本当の姿になることを求めて、呻いている。やがてそれは成る。それをしっかりと見つめながら、我々は忍耐してその時を待つ」

ということをローマ書8章で言っています。

### ●神のみに従え

キリストの世界というのは地上だけで終わらない。本体は天界にある。しかし、それは天界にあるだけで、断絶があるなら、これはもう仕方がない。その天なる世界が地に下りてきた。正にクリスマスがそうです。天界におられた霊なるキリストがああマリアさんの中に宿った。馬槽まぶなの中に宿った。そして、あのように人として成長して、そして齢30歳くらいになつて伝道を始めたわけです。エッセネ教団とかいうところにおられたということなんです。そして、あの洗礼のヨハネからヨルダン川でバプテスマを受けられ、水から上がられたら天が開いて、聖霊が鴿はとのごとく降くだった。



「これはわが心になう者、わが悦ぶ者」

という御声があった。それから、あの荒野の試みです。荒野で、そこに獣しかないような寂しい所で四十日四十夜、断食して祈っておられた。悪魔がやって来て、

「お前は神の子だろう。神の子だったら、その石ころをパンに変えるぐらいはわけないだろう。やってごらん」

と、誘いかけてきた。その時に、

「人が生くるのはパンのみによるにあらず。神の口から出る一つ一つの言ことばで

人は生きる」

と言われた。満腹している人間が言う言葉ではなかった。もう腹と背中がくつつくくらいにきつとキリストも痩せ細っておられたと思うんです、四十日四十夜ですから。その飢餓のどん底で悪魔がささやいてきた。「パンが欲しいね。お腹がグウグウ鳴っているだろう」と。その時に、

「人が生くるのは神の言で生きる」

と。即ち、キリストは生命賭けで、人が生きる世界というのは、肉体を越えた本ものの神の生命、神の霊、神の言、それで人は本当に生きるということを表してくださったと思います。それから、次に悪魔は、

「高い塔の上から飛び下りろ。『天使が来て支える』とちゃんと聖書に書いて

ある。やってごらん」

と言った。キリストは、

「神を試みてはならない」

と言って、退けられた。それから三つ目は、山の上へ連れて行って——これは多分、霊で連れて行ったんでしょう——この世の栄華を、地上の栄耀栄華を見せた。

「私と手を結ぶならば、これを全部上げるから」

悪魔のささやきでは、「私に平伏ひれふすならば」ということですから。その時に、

「神のみに従え」

と言われた。これも「ノー」です。ですから、キリストの伝道のすべて、そのあとを貫いていたのは、この荒野の試みのあの三つだったと、私は思う。パンの問題から、奇蹟の問題から、そして、この世の富の問題。それを全部退けて、ただ「神のみに従え」と言われた。それをひたむきに歩かれた。

### ●無条件絶対の十字架の愛

しかも、キリストは自分のために何一つ求めておられない。

「武器をとるな」

と言われました。キリストほどの平和主義者はない。棒やいろんなものを持ってキリスト



を捕らえに来た時に、弟子たちは刀を抜いて防衛しようとしたら、

「全部、剣をおさめろ。私がこうなることは御旨である」

と。ゲッセマネで苦しんで苦しんで祈られたでしょ。ゲッセマネの祈りで、

「父よ、この他に道がないのでしょうか。もしもできることなら、この杯を取り払ってください。しかし、私の思いではなくて、あなたの御意をどうぞ成してください」

と。これがゲッセマネの祈りですものね。人間にはどうてい味わうことのできない苦しい祈りだったと思うんです。と言いますのは、私たちは二三日、神さまから離れていても、知らん顔でしょ。四、五日たって、

「あつ、ちよつと何だか疎遠になりすぎたな。もう一度もどろろ」

とか言つて、聖書を繰ったりお祈りを始めたり、まあ、そんなもんですよ。

ところが、キリストというお方は神さまの懐の中に生きていた方です。お生まれからそうでしたし、そのあとも、「父よ」と祈ると、神の懐の中に宿っておられたお方です。これはヨハネ伝一章に出てきます。

「神の懐にいます独子の神のみ父を現したまえり」(ヨハネ1:18)

とある。いつも本当に、ちよつと赤ちゃんがお母さんに抱かれているように、父の懐の中に抱かれている。だから、

「我と父とは一つなり」

と素直に告白できた、そのお方があのゲッセマネでは引き離され、蹴飛ばされたんですから。捨てられたんです、残酷ですよ。実に残酷です。子どもとしてのキリストは、

「僕としては御意に従います。しかし、子どもとして、どうして、それを私は受けねばならないのですか。今までの蜜月の抱き抱かれる、そういう一つなる関係がどうして引き裂かれなければならないのですか。あなたは全知全能のお方ではないですか」

と。これがキリストのプロテストですよ。でも、

「十字架にかかれ」

と。それしか答が返つてこない。だから、

「はい、わかりました。御旨に従います」

と。あれがゲッセマネの祈りだったと、私は受けとっています。だから、

「額から落ちる汗が血の滴のようであった。天使が来て助けた」

と書いてある。私はああいうものをそのまま受けとっています。目撃証人があろうとなかろうと、そんなことはどうでもよろしい。私はあれをそのまま受けとっています。

だからこそ、あの十字架というものは凄い。ご自分のためではなかった。神の愛が十字架を通して貫かれた。私たちはどんな出来損ないでも全部、その十字架で背負われない罪



はひとつもない。全存在がそこでもう背負われている。引き受けられている。しかも、過去・現在・未来の全部。そこへいつも究極のところにはこない、私は落ち着かないんです、徹底しないと。だから、無条件絶対という。条件がないんです。「お前はいいやつだから、出来がいいから」とか、そうではなくて、無条件です。どんなやつでも無条件。「絶対」というのは、相手の姿に関わりないということです。

### ●全部引き受けてくださるキリスト

キリストがああ「山上の垂訓」と言われているところで言われておられるのは、

「天の父は善き者にも悪しき者にも陽を昇らせ、雨を降らせたまう。あなた方

は自分に挨拶してくれる者、自分に親切にしてくれる者、そういう者たちに

だけ挨拶して、何になるか。天の父の心はそうではない。善き者にも悪しき

者にも陽を昇らせ、雨を降らせたまう。汝ら、天の父の全きまったが如く全かれ」

です。「無条件に人を愛しぬけ」と言う。できっこないですよ。それで、私の小池先生はどう教えてくれたか。

「私たちにはできっこない。ということ、キリストが私の中で『全部してあげるよ』

ということ。キリストは、『私がお前の中で全部してあげるから、お前は何も心配

はいらない』と。全部、向こうにお任せする」

と。それまでの私は、

「クリスチャンになった以上はこれをせねばならぬ。これができなかつたら、お前

は神の栄光をけなしている」

と言って、断罪していたわけです。それがもう、開き直りもいいところですよ。全部、キリストがやってくれる。その代わり、威張ることは何もない。自分でやったら、威張れます。でも、自分ではないんだから。キリストが私の中で全部なさる。だから、キリストに全部お返しする。いわゆる成功も失敗も、その他プラス・マイナスも全部、キリストです。これが私の主キリストなんです。全部引き受けてくれる。皆さん、ひよつとしたら、「そんなだったら、つまらんだらう。自分で少しは誇りたいだらう」と仰るかも知れないけれども。そうじゃない。本当に誇るところなんて何もありませんよ。

### ●一人ひとりが天下一品

それともう一つ、私の中に起こった変化は、人に対して「ありがとう」と言えるようになった。何をしていただいても、「ありがとう」と。すべて「ありがとう」という気持ちが出てくるようになった。それから、あまり、人を責めたりとか、羨うらやんだりとか、そういうこともなくなりました。

「お前はお前だよ。お前は天下一品だ」



と。一人ひとりに「お前は天下一品だよ」と。誰一人として、無駄に生きている人は一人もいない。この世の教育は間違っている。頭のいい人ばかり大事にする。入学試験だって、そんな学科ばかりでしょ。そして、試験に落ちたら、人格否定みたいになる。これが今の世の風潮でしょ。これはもう完全に間違っています。それぞれが賜った善きもの。みんなそれぞれ何かを賜っています。それを引つ張りだして、花咲かせる。そのときに、その人に喜びがある。それが本当の教育です。

私はイチロー選手なんて凄いと思う。あの方はまだキリストをご存知ないでしょうけれども、かまわない。あんなに自分の力であそこまでやれたら立派だと思う。あのように打ち込んで、あの道では本当に世界ナンバーワン、オンリーワンです。やはり凄いと思う。松井選手だって凄いと思う。その他いろんな分野で日本の方々は映画の世界でも、芸術の世界でも、いろんなところで個性が花咲いています。そこへもつと根つこの世界が根づいたらもつと凄くなると思う。

### ●本ものの世界に入れ

「日本人は独創性がない。真似ばかりやっている」

とかよく、言われました。それはひとつは、本当の精神的な深みの世界を探り出すことをしばらくやめていたからではないかと思う。やはり、日本のあの鎌倉仏教以降の文化の中には、仏教の世界ですけども、深みへと入っていくという流れがあったと思うんです。

ところが、明治以降、キリスト教が流れてきたけれども、上辺<sup>うわべ</sup>だけを受けとって、文明文化を、果<sup>み</sup>だとか花だとかを受け入れて、近代国家の恰好をとって、追いつけ追い越せと、なんとか成功した。けれども、「では、あなた方のアイデンティティ(存在証明)は何か」と問われたときに、何もないんですね。そこでまた、政治のトップにいる方々は復古的なことを仰るでしょ。「昔の日本はよかった。あの日本民族の伝統に帰れ」と。伝統は大事にしたらいけれども、伝統だけに留まったら、また何かの二の舞になりはせんかというのが、私は心配なんです。

教育基本法をたしかに変える必要はあるでしょう。でも、本当に変えるなら、根つこの世界が大事だということです。学校の中で本当に、

「人間は生きるために何が大事か。人は何によって生きるか」

を教える。それには先生も親も全部その世界に入らないと、口でしゃべったって、しようがない、その人が身体<sup>からだ</sup>で示さなければ。「親父<sup>おやじ</sup>の背中を見て育つ」と言うように。大人の姿を見て、子どもが育つ。その大人がだらしなかったら、子どもに何をよくしたって、これはだめです。

ですから、私は、五十年、百年かかるかも知れないと思いますけれども、今日ここに来てくださっている方々は、そういう世界を本当に大事にして、今からでも全然遅くはない。



七十の手習いでもいいし、五十の手習いでもいいし、二十から始めてもいい。やはり、そういう本ものの世界に自分が入り込んで、その中から湧き出てくるものは本ものですね。そういう意味の個性を持っていただいて、ご自分が賜っているさまざまな賜物が花咲いていたり、日本の民族は素晴らしく、また文化の花を咲かせるでしょう。世界からも尊敬される民族になりうると思う。長い間、それが失われていたということを思わざるをえないんです。

### ●罪と死の法からの解放

さきほどの小池辰雄という先生が私に教えてくれたことで非常に大きかった一つは、「罪」という問題です。教会で聞いていた「罪」というのは、心の中の汚い思いとか、人を憎むとか、そういう心の中の問題。それから、具体的な生活の中でのあの罪、この罪という行為ですね、思いと行為。これのネガティブな面が罪だ。神さまの御意みこころにそわない、そういうものが罪だと、こういうふうにならないうちに教わってきた。それを悔い改めなさいと。ところが、小池辰雄は違ったんです。

#### 「存在そのものが罪だ」

と言われた。これはきつい宣言です。「存在そのものが罪だ」ということは、我々の人格的否定ですよ。日本人は、「とうていそんなのは嫌だ」と言うに決まっています。でも、その「存在そのもの」ということは結局、人間存在の自己を立てる、神さまの前に自我を主張する、御意みこころではなくて自分を立てる、これが罪だという。ひとつの言葉だとか、行為だとか、思いつきとか、そういう派生的なものではない。存在そのものが罪だという。この自覚を持つと言われたんですね。今度は逆に、

「それが十字架で全部片づけられている。あなたの全存在がもう贖われている。きれいになっている。きれいになっているところに聖霊という神の聖い霊が突入してくる。それであなたは新しく生まれ変わる。それが大きく育っていく。しかも、あなたとその聖なる霊とは一つなんだ」

と。あなたが何も否定されているのではない。あなたの自我という、己を立てるといって、そういう性さが、これを聖書では「肉」と呼んでいる。聖書で「肉」と「霊」というのがあります。パウロが言っている「肉と霊」ということは、あの「肉」は肉欲ではない。「肉」というのは、

#### 「自己中心で自我を立てる」

という生まれながらの人間性です。それに対して、「霊」というのはキリストみたくに、

#### 「神中心で、神によって生まれた新しい生き方」

です。これが衝突している。パウロはそれで悩んだ。ローマ書7章で言っています。

「ああ、われ悩める人なるかな。この死の身体からだより誰が私を救い上げてくれるか」



と。8章にききますと、

「われキリストのゆえに感謝す。キリスト・イエスの中に働いている生命の御霊の法が我を罪と死の法から解き放したればなり」

と、こう宣言している。

「キリスト・イエスの中に働く生命の御霊の法」

これは十字架のところまで働いている。これが私を今までとらえていた「罪と死の法」から、法則から完全に解き放したと。そして、26節あたりに行きますと、

「御霊も我らの弱きを知りたもう。我らはいかに祈るべきかを知らざれども、御霊自ら言い難き呻きをもて執成したもう」

と。そういう神を愛する者のためには、いつさいのことをプラスにしてください。

「いつさいのことが相働きて益となるなり」

と。そして、私たちは、

「やがてキリストの栄光の姿に我々自身を変えてくださる。これが我々の希望だ」

それに続きまして、

「誰が神の愛から我らを引き離すことかできるかと、最後にうたわれている。

「キリスト・イエスは甦って神の右にいまして、我々のために執成していただく。誰が一体、神の子たちを訴えるのか。キリストは我々の前に体をはつて守ってくださいるんだから」

というようにことを言って、

「天使もその他いろいろな、生も死も、この地上のあらゆるものも、霊界のあらゆるものも、どんなものも、キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すことはできない」

と。これでローマ書8章は終わっているんです。

そういう、今まで私を苦しめるような神の言葉が全部、私を力づけ生命づけ励ましてくれる言葉に変わった。これが非常にありがたいことでした。とにかく、

「お前自身を問題にしなくていい。自分自身を問題にしなくていい」

と。これが大事なことです。特に、クリスチャンの方々は非常に良心的で、自分を問題になさる方が多い。「まだだめだ、まだだめだ」と。ここから早く脱却して、大空を羽ばたくように自由な世界にはばたいていただきたいんです。パウロはガラテヤ書の中で言っています。

「自由を得させんために、キリストはあなた方を解き放ってくださいました。二度と奴隷の軛につながれるな」



と。その「奴隷の轡」というのは「律法」なんです。律法というのは、我々にとっては、「すべし、すべからず」というおきてなんです。

「神の御意はこうだから、もつとこうしなくてははいけません」

と言って迫ってくるのは律法です。そういうものに縛られるなど。あなたの中にキリストの霊が宿つたら、この方は自由な御霊ですから。「生命の御霊の法」であなた方の生活はひとりでに御意にかなうような、そういうところへ導いてくださる。

### ●聖霊、助け主、霊なるキリスト

あのヨハネ伝の14章、15章、16章というのは素晴らしいところですよ。14章のところは「訣別遺訓」と言いまして、イエスが弟子たちとお別れの最後の晩餐で語られたという、そういうことになっている。最後の晩餐であんなに全部のことを語られたかは私は知りませんが、とにかく、そのように御言葉が編集されています。あれを読んでいますと、本当にありがたい。

「助け主、聖霊、このお方がやがてあなた方のところへ降ってくる。私が父のみもとに行くならば、その方をあなたの方に遣わす」

と。その「聖霊、助け主」というのは、生身のイエスという方から見れば別人格ですけれども、天界に行かれたキリストから見たら自分の分身なんです。天界に霊なるキリストがいらつしやりながら、太陽の光が万人の中にしみこんで熱となつて宿るように、キリストの霊の「分霊」と言っているでしょうね。源なるキリストの、霊なる人格キリストから流れてくる霊、これが聖霊となつて、「助主」となつて降ってくる。

「この聖霊はキリストに栄光を帰せしめる。私から受けて、私のことを明らかにする。この助け主は真理の御霊である。このお方があなた方のところにやってくるならば、あらゆる真理へとその方は導き給う」

と書いてある。正直、弟子たちはあの3年間、キリストと一緒に生活しているながら、本当のことはあまりわかつてなかった。キリストの十字架が間近というときに、「誰が一番偉いか」と、十二弟子の中で争いをやっている。そして、お母さんたちは、「うちの息子をあなたの天の聖座の右に坐らせてほしい」なんてことを陳情している。そういうことがちゃんと書かれている。キリストは何と仰つたか。

「天国では、偉くなりたいと思うなら、上になりたいと思うなら、一番下になれ。一番仕える者になれ。頭たらんと思う者は僕の姿をとれ。私が来たのは、あなた方に仕え、そして自分の生命を贖いとして与えるために、私はやって来た」

と、そういうふうにご言っておられます。それほどに弟子たちの、いわゆる肉なる弟子たちとキリスト・イエスとの間には断絶があった。そして、最後は全部、キリストを捨てて逃



げ去った。

ところが、復活されて五十日目の五旬節、ペンテコステの時に、十日間の祈りの後に聖霊が火のごとく降<sup>くだ</sup>ってきた。それから弟子たちは生まれ変わった。それまでは、迫害を恐れ地下に隠れていた弟子たちは、堂々とキリストのことを証<sup>あかし</sup>するようになった。そして、とっ捕まったり笞<sup>むち</sup>打たれたり、いろんなことをされるけれども、びくともしなくなった。あの使徒行伝——今では「使徒言行録」という言葉で訳されていますが——あの、ペテロやヨハネ、そして後ほどのパウロ、そういう人たちの足跡をたどると、これはもう神業<sup>かみわざ</sup>ですよ。正に、復活されて天界に行かれたキリストがその弟子たちに乗り移って、一緒に働いておられる。しかしか思えない。そして、何よりも、殉教を恐れていない。

「先生、あなたと一緒に死にます」

と言っていたペテロは、一目散に逃げ去ったでしょ。弟子たちはみんな逃げ去りました。ところが、あの使徒行伝に表れている弟子たちは本当に、

「キリストの聖名<sup>みな</sup>のために笞<sup>むち</sup>打たれて、私はうれしい」

と言つて、はりきっている。そして、最後は殉教して行った。そういう生命賭けの人たちを通して、御霊、聖霊、助け主は今日まで伝えられてきております。

たしかに新約聖書は薄平いものです。そのあと二千年たっているんですから、その間にキリスト教の方はいろんな思想も発達したでしょう。特にカトリックの方は教父たちというのがあるんな書物を著したりして、それはそれで私は尊いとは思いますが、やはり私はあの初代の姿のように、霊なるキリストに無条件で直結して、そのお方に私の中に来てほしい。そのお方に日本各地に根を張ってほしいと思つている。

### ●飛び込む先はキリストのふところ

タンポポという花がありますね。あの種は風に吹かれてフワーと飛んで行って、どんな所にも根づく。岩場の石と石の間の小さな所にも根をおろしてタンポポが咲きます。凄<sup>すご</sup>い生命力ですね。私は、キリストの霊というものはタンポポだと思つてますよ。どこにでも飛んで行って、着地した所で根づいて、そうやって花を咲かせる。

「あなたの器は汚いから、宿らない」  
なんて、そんなことは仰らない。

「あなたさえその気になれば、心を開けば。あなたを私がもう贖<sup>あがな</sup>つてしまつている。十字架で全部引き受けた。だから、あなたは自分を問題にしなくていい。私を受け入れたら、タンポポの種が宿<sup>すく</sup>つて根をおろして素晴らしい花となる。それがお前の花だ」

と言う。これは不思議なんです。私たちは、「キリストに栄光を」と言います。ところが、キリストは、



「お前はよくやったね」

と、こう言っただけで誉めてくださるんです。私はやはり、向こうへ行ったときに、ちょっと誉めてもらいたいなと思っただけなんですけれどもね(笑)。皆さん、いかがですか。やはり、向こうへ行ったときに、なにかうつむきながら行ったら、恰好が悪いですよ。マラソンの野口みずきみたいにワァーッとゴールでテープを切るような、ああいう恰好いいことは、私はできないと思いますけれども。でもやはり、胸をはって、飛び込む先はキリストのところですよ。いいではありませんか。それから、その他いろんな人たちがいるかもしれない。神の国のために働いた方々が、「お前はよくやったねえ、待っていたよ」と、こう言ってくれる。これは本当にうれしいことですね。

●愛に生きた人、心優しき人に神は宿りたまふ

クリスチャンの方々が割合に、死後の世界に対して明るい思いを持っているのは、やはりそういうことが知らず知らずしみこんでいるからだと思う。死はこの世界から向こうの世界へと、次元が変わるだけ。この見ゆる世界、物質的な世界、我々の肉体がそうですね。そういった物質的な世界から霊の世界へ、これは目に見えませんが、たしかに実在する。しかも、それが本質、本ものである。そういうところへ変貌して行く。

よく、死後の世界をちよつと覗いてきたとかいう臨死体験がある。あれを私はやってませんので、何とも言えませんけれども。あの方々の仰るのは全部、共通点があるんです。

「お花畑が近づいてきた。きれいな音楽が流れてくる。自分はそこへ飲みこまれそうになった。先に逝ったお爺ちゃん、お婆ちゃんが呼んでいる。そしたら、後ろから、そこへ行ったらだめと引き戻されたら、われに返った」

とか。そういう話を聞くでしょ。ですからやはり、どの宗教というようなことではなくて、本当に霊界というのは現に存在するんです。そこでは本当に神の法則が貫く。

光を求めた方、愛に生きた方、心優しき方々、その方々はキリスト教であろうが何であろうが、そんなことは関係ない。その方の生き方が向こうの世界を決める。キリストは、「私の名を呼ばないやつは入れない」なんて、そんなケチなことを仰いませんよ(笑)。小池辰雄先生も言いました、

「キリスト教のキの字も知らなくても、さっさと天国へ入る。『キリスト教だ、キリスト教だ』と言っていた人が、『ちよつと待て!』と言われることがいくらでもあるよ」

と仰っていた。だから、異端だと言われたんでしょうね。でも、私もそうだと思う。レッテル、着物で人を判断なさらない。本当にその方の本質、生きざま、それは一言で言いますと、

「己を空<sup>むな</sup>しうして、人のためにまた神のために自分を献げて働いたか」



という、それなんです。金のために、己が名譽のために、己が何とかのために銅像を建てて、というのはだめです。人が建てるのはかまわない。「己のために」ということでやっているものはだめだ。キリストは仰った。

「この世で己が生命を救わんと思う者はこれを失い、わがため福音のため己を失う者は永遠の生命を得る」

と。本当にそうだと思う。そういう希望あるいは確信がありますと、どんな仕事に従事なさっていても、充実感があるはずですよ。

マザー・テレサは本当に路傍で死にゆく人たちの最期をみとられた。

「あなたはこういう方法でお葬式してほしいですか、弔とむらってほしいですか」

と。ヒンズー教ならヒンズー教、こっちの宗教ならこっちの宗教。それをちゃんと聞いて、そして引き取って、その通りなさった。素晴らしいと思う。そういう愛の行為ですね。

それから、コルベ神父。あのアウシュビッツで、ある男の人の犠牲になって、自分が命を献げた。そういうお話とか、その他枚挙にいとまがありません。要するに、己を空しくして、真理のため、あるいは人のため、神のため、何かそういうことのために自分を献げていった人。その人は本当に、生きている時に輝いているだけではなくて、使命を終えたならば必ず向こうで大なる迎えられ方をするはずですよ。それでなかったら、この世界というのはあまりにも矛盾に満ちすぎています。あまりにも不公平すぎますもの、この地上だけで見ていたら。けれども、この地上でいろんな苦勞をなさった方、いろんな涙を流された方、その方々は必ずその涙はぬぐわれる。喜びの涙に変わるときがある。

「恵福さいわいなるかな、悲しむ者、その人は慰められん。恵福なるかな、柔和なる者。

その人は地をつがん。恵福なるかな、憐憫あわれみある者。その人は憐憫を得ん。恵

福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん」

と。そういうふうな、まるで消極的で負け戦のような宣言でしょ。この地上なら、強き者は幸いなり、金のあるやつは幸いなりと言うが、

「貧しき者、悩んでいる人、悲しんでいる人、柔和な人。権力者でなくて、柔和な

ひと。そういう方々の中にこそ神が宿り給う」

という。これはどんなに大きな慰めであるか。きつと当時の人々の中にしみ込んだだろうと思います。

●豊かで広々とした世界に入れていただく

私は皆さまにお話したいと思いましたが、我々が今までは自分中心で生きてきたけれども、自分の世界観の中で生きてきたけれども、このキリストというお方にぶつかり、キリストという方が生きておられた世界、語っておられる世界、今も我々に示してくださいる世界、それがいかに豊かで、本当に豊かな素晴らしい広々とした世界かと。それが単に頭



の問題でなくて、我々の身体の中にしみこんで、一日一日を生きる原動力となっていくという事です。

ヨハネ伝4章のところに、サマリアの女との問答がある。真昼どきにキリストは旅に疲れて、スカルという町においでになる。そこにヤコブの井戸というのがある。これは先祖のヤコブがくださった井戸で、それからずっと今日までサマリアの人たちはその井戸から水を汲んで、家畜もそれを飲んでいた。ところが、キリストはそのサマリアの女に、「水をちょうだい」と言われた。サマリアの女は怪訝な顔をした。ユダヤ人とサマリアの人たちには断絶があった。サマリアの人たちは異邦人と結婚したりして混血ということになったものだから、ユダヤ人は純粹ですから、断絶があった。だから、ユダヤ人がサマリアの女に語りかけることはない。イエス・キリストはそんなことはお構いなしに、疲れると、

「水をちょうだい」

と言われた。サマリアの女は、

「なぜ、ユダヤ人のあなたが私に語りかけられるんですか？」

と訊ねる。そしたら、キリストは、

「もしも、あなたが、私が何者かということを実に知ったならば、あなたの

方から私に『水をほしい』と言うにちがいないよ」

と言われる。そしたら、その女の人は非常に単純な人ですから、

「あなたは何も汲むものを持っていないじゃないですか。釣瓶つるべも何もないじゃないですか。どうやって、この井戸から水を汲みあげるんですか。この井戸

はヤコブの井戸といって、有名な井戸で……」

とやるわけです。そしたら、キリストは、

「誰でもこの水を飲む者はまた渴く。しかし、私が与える水を飲む者は、永遠に渴くことがない。生命の水がその人の中で泉の如く湧き出る。そういう水を私はあげるんだよ」

と仰います。それでまた、そのサマリアの女は驚く。それから更に問答が続きまして、

「あなた方はエルサレムで礼拝する。私たちはこのゲリジム山で礼拝します」

というようなことを問答するわけです。そしたら、キリストは、

「いや、この山でもあの山でもない。霊と真まこととをもって礼拝する者たちを父は求めておられる。今、その時が来ている。神は霊であるから、礼拝する者も霊と真とをもって礼拝すべきである」

と言われる。私はあそこを読んで、これは革命的な宣言だと思いました。つまり、宗教とか宗派とか、そういった伝統的なものの完全否定ですから。私の言う「直結」ですね。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもって礼拝せよ。この山でもあの山でもない。何々教ではない。何々宗ではない。それらを突き抜けた本ものの世



界にあなたは入りなさいよ」

と。そのサマリアの女というのは身持ちのわるい人で、

「五人の夫があつたけれども、今のは本当の夫ではないね」

と、身の上を見通されて、

「ああ、あなたは預言者だ」

と言う、そういう問答がそこに出てきている。

そのように、私は皆さまに、もしも既成のキリスト教だとか、そういう観念をもつておられたら、それをぶっ壊して、本当にゼロからの出発で、この混じりけのない霊なるキリストとの混じりけなき本当の結び合わせをしていただきたい。「宗教」「レリギオ」という言葉は、「再び結び返す」という言葉だそうです。再び結び返す。何と結び返すか。切れていった霊界の大なるお方と、それから私たちと、その間を繋ぐ。キリストは正に、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と仰った。なんせ、天から降<sup>くだ</sup>ってきてくださった方ですものね。しかも、ご自分のためではなく、私たちに用があつて来られた。私たちを救い上げて、その本当の世界に入れようと思つて来てくださったお方です。

「我は道なり、真理なり、生命なり。我に由らば誰にても父のみもとに至る者なし」

と、そう言つてくださった。パウロも言っている。

「キリスト・イエス罪人を救はん為に世に來り給えりとは、信すべく正しく受くべき言なり。其の罪人の中にて我は首なり」

と、「テモテ人への手紙」というところで言っている。だから、小池先生も言われた、

「キリストは、立派な人には用はないんだよな。立派な人には用がない。出来損ないの我々みたいな人のところへ来てくれた。だから、罪びと大歓迎だ」

と。「罪びと」というのは、さつき申しましたように、自分の自我で悩んでいる人です。キリストは言われた、

「健やかなる者は医者を要せず。病める者のみこれを要す。私が来たのは正しい人を招くためではない。罪びとを招いて悔い改めさせるためである。預言

書にも書いてある。「我、憐憫を好みて犠牲を好まず」とはどういうことか

と。「憐れみ」というのは愛ですね。

「憐れみを好みて犠牲を好まない」

とは、旧約聖書のミカ書に出てくる言葉です。ところが、その「憐れみを好みて犠牲を好まない」その神さまの御意の、キリストは犠牲になつてしまつたわけです。正に犠牲になつて、そして我々を贖い出した。この罪と死のがんじがらめの中から我々を救い上げて、本当に光に満ち溢れた愛の王国へと生かしてくださった。キリストは復活して、我々





「ああ、俺も今度生まれ変わったら、鳥になりたい」

なんて言ってるし、本当に無邪気な方でしたね。そういうふうな、

「雲を見たら雲になる。海を見たら海になる。花を見たら花になる。そんな境地だよ」

ということを言われました。小池先生は92歳で向こうへ往かれた。ちょうど今年は生誕百年という年になってしまったけれども。まあ、私はその先生の導きを受けたおかげで今日があると思っています。そして、8年前に先生が向こうへ往かれてから、何か私もたくましくなりました。やはり、天界から応援しておられるんだと思います。

私の両親もそうですけれども、そういう肉親とか、親しい者が向こうへ往きますと、今度は応援団になって、くつついてくれるような気がいたします。これはどこにも書いてませんよ、そんなことはね。書いてませんけれども、そんな気がするんです。ですから、地上での別れというのは辛い悲しいことですけれども、やはりそれは一時的なことであって、本当に天界から、愛する者のために祈っているにちがいない。助けてくれるにちがいない。だから、またこちらも、いい加減な生活はできませんね。そんな思いで私は歩んでいます。

聖書の言葉を皆さんと味わう時間がなくなってしまいました。私のお話はどこで切ったつてよろしい。だから、この辺で終わらせていただきます。どうも、ご静聴ありがとうございます。ありがとうございました。

(「エン・クリスト」誌第58号、2005年3月に掲載)

